



# 学校だより

子供の「やる気」を育てます

12月号 令和7年11月28日  
西東京市立保谷第一小学校  
校長 原 之 雄  
〒202-0004 西東京市下保谷1-4-4  
TEL042-422-4513 FAX042-424-7117

<http://www.nishitokyoed.jp/~houya/>

email [ehouya1@nishitokyoed.jp](mailto:ehouya1@nishitokyoed.jp)

保谷第一小  
ホームページ  
QRコード



## 読書のススメ

副校長 藤本 知子

いよいよ2学期も残り1か月ほどになりました。学校では「2学期のまとめ」や「冬休みの過ごし方」とともに、来週末に行われる「保一作品展」の準備に追われていますが、今回は、冬休みにできることの一つとして、読書について考えてみたいと思います。保谷第一小学校では、11月10日(月)～読書旬間を設け、子どもたちに読書に対する興味・関心が高まるよう様々な取組をしています。

- ① 図書委員会による「読書集会」…オンラインで本の内容クイズ
- ② ワクドキ読書…きょうだい学年でペアを組み、上学年による下学年への読み聞かせ
- ③ 朝の時間の読書タイム…朝自習の時間に読書
- ④ 読書記録カードの配布…全校に読書カードを配り、記録
- ⑤ 図書委員によるイベント…読書ビンゴ
- ⑥ 「先生方のおすすめ本紹介」…教員のおすすめの本の紹介文を配布
- ⑦ 読書バイキング…全教員による全校一斉の読み聞かせ



**ワクドキ読書**  
6年生による1年生への読み聞かせ

勤勉の象徴として昔の学校には銅像があった二宮尊徳は、薪を背負いながらも読書を続けました。エジソンは、デトロイトの図書館の本棚の端から順に本を読んでいたそうです。また、キュリー夫人も、いたづらされていることにも気付かず読書を続けたと伝えられています。歴史に名を残す立派な人物は、多読をしていることが多いようです。

ここ数年、活字離れの問題が提起されていますが、子どもの読書について全国学校図書館協議会の学校読書調査の結果を見てみると、高学年児童の1か月間の平均読書冊数は、令和6年は13.8冊、ここ10年間は10冊を超えており、20～25年前に比べると1.5倍から2倍に増えています。(令和2年は未実施。)しかし、教員の印象としては、さほど増えているという感じはしていません。というのも、1冊も読まない児童の割合が8.5%と10年前の2倍に増えており、読む子と全く読まない子の二極化になってきているからかもしれません。

本来、子どもたちは、読書好きなものです。しかし、テレビやゲーム等、簡単で刺激的で楽しい遊びがたくさんあり、情報はパソコンで簡単に手に入る時代ですから、「読書離れ」が起きるのも不思議ではありません。ウェブで情報が溢れている時代でも、1冊の本を手取る意味とは何でしょうか？本の素晴らしさとは何でしょうか？

よい本には、大きな世界観があります。私たちの考えも及ばない様々な世界を伝えてくれます。本は、時間と空間を超えて様々な人々に出会わせてくれます。そして、読者である私たちは、経験したことのない状況での心情や問題の対処法を知ったり、先人たちの足跡をたどって、多くのことを学んだりすることができます。また、「行間を読む」という言葉のとおり、読みながら思いや考えを膨らませることができるのも読書の素晴らしさです。本の世界は、読み手である私たちの心の中に静かに定着し、考えの土台を作ってくれます。読書は、知識を蓄え、感覚を磨き、論理的思考力等の考える力を養います。視野を広げ、情操力や想像力、表現力も鍛えます。読書する意味は、そこにあると考えます。だから本を手にするのです。本を手にして欲しいのです。

冬休みには、自分で使える時間がたくさんあると思います。この機会に、保谷第一小の子どもたちがたくさん読書をして本に親しむ習慣を身に付け、よりよい人生を切り拓いていく力を養ってほしいと願っています。すてきな本と出会って、一回りも二回りも成長した子どもたちと新年に再会できることを楽しみにしています。